

## イザヤ38-39章 「主の恵みに応じない弱さ」

### 1A 寿命を延ばされた主 38

1B 涙の祈りに答えられる方 1-8

2B 感謝の祈り 9-22

1C 死の苦しみ 9-14

2C 賛美への献身 15-20

### 2A 高ぶりを試された王 39

#### 本文

イザヤ書 38 章と 39 章を、今晚は読みます。今、イザヤ書全体の中で、最も大切な背景となる歴史的出来事、エルサレムの、アッシリアからの救いを読んでいます。前半部分で、シオンにおられる主こそ、アッシリアから救うことを教えていました。そして 36-37 章で、ヒゼキヤが主の宮に行っている場面を読みます。彼は、まさにシオンにこそ救いがあることを信じていました。シオンに主がおられるからで、だから主の宮に入って祈ったのです。センナケリブ王からの脅迫の手紙を開いた時は、主の宮の中で、主の前でその手紙を開いて、祈ったのです。

38 章と 39 章には、ヒゼキヤの主の宮に対する情熱と共に、心を将来に敵に許し、王宮にあるものを見せてしまった失敗を読みます。彼が病にかかりますが、主がそれを癒される恵みを読みます。ところが、彼は恵みに応じず、高ぶってしまい、それが将来のバビロン捕囚を許してしまうという、実に痛い話を読んでいきます。

### 1A 寿命を延ばされた主 38

1B 涙の祈りに答えられる方 1-8

<sup>1</sup> そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。そこへ、アモツの子、預言者イザヤが来て、彼に言った。「主はこう言われる。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。治らない。』」<sup>2</sup> ヒゼキヤは顔を壁に向け、主に祈った。

時は、「そのころ」とあるように、いつなのかははっきりしません。6 節に、「わたしはアッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出し、この都を守る。」と主が言われているので、アッシリアの包囲がある時に、彼が病にかかって死にそうになっていたと考える人たちが多くいます。私も、前回、イザヤ書を教えた時は、そのように説明していました。けれども、37 章 30-32 節に、主がヒゼキヤに対して、アッシリアがいなくなった後も、彼らはいつ彼らに戻って来るか分からないという、不安は払しょくできない様子がうかがえます。主は、決してそんなことはなく、城壁から出て来て畑仕事をする事ができるのを、約束しておられます。ですから、これがアッシリア軍の包囲が解けた後と

考えてもおかしくありません。アッシリア軍に包囲されている時であるとも考えることもできるし、殺された直後であるとも考えることもできます。

彼が病気で死にかかっていた。それに加えて、イザヤは、「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。治らない。」と、主のことばを宣言します。これは過酷な宣言であると同時に、ある意味、王への気遣いでもあります。人が死ぬことについて、前もって告げられ、それで家の整理ができるというのは、憐れみです。癌は優しい病と言う人がいますが、それは前もって余命が伝えられるからです。突然死こそ、残された人々には酷い仕打ちであります。

しかし、ヒゼキヤは、主から告げられても、「顔を壁に向け、主に祈った」とあります。彼はこの時、約 40 歳であることが分かっています(Ⅱ列王 18:2)。そしてこの箇所から、彼が、主の宮に入ることが病のためにできていないことがわかります。壁に顔を向けています。

<sup>3</sup>「ああ、主よ、どうか思い出してください。私が、真実と全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたの御目にかなうことを行ってきたことを。」ヒゼキヤは大声で泣いた。

ヒゼキヤは、ここで自分の正しさを主の前で誇っているのではありません。主のことばそのものにある約束をもって、訴えています。彼は、主の宮で祈ること、賛美することが強い願いだったのです。詩篇 15 篇に、こう書いてあります。「詩 15:1-2 【主】よ だれがあなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれがあなたの聖なる山に住むのでしょうか。全き者として歩み義を行い 心の中の真実を語る人。」歴代誌第二 29 章から 32 章までを、ぜひ、読んでみてください。ヒゼキヤの情熱がどこにあるかが分かります。主ご自身に、そして主の宮にあることが分かります。彼は、ダビデと同じように礼拝を愛していました。

<sup>4</sup>そのとき、イザヤに次のような主のことばがあった。

列王記第二 20 章を見ますと、イザヤがこの言葉を告げて中庭を出ないうちに、主がヒゼキヤの癒すことを約束されました。しかも三日目に癒されることまで約束されています(4-5 節)。主が憐れみ、みこころにかなう祈りをすぐ聞かれることが分かります。

<sup>5</sup>行ってヒゼキヤに告げよ。『あなたの父ダビデの神、主はこう言われる。わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたの寿命にもう十五年を加える。<sup>6</sup> わたしはアッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出し、この都を守る。

主は祈りを聞き、それだけでなく涙も見てくださいます。私たちが言葉にもならない、心のうめきにさえ耳を傾けてくださいますし、心の苦悩が表れている涙も見逃さないでくださっています。

そして 15 年を、引き延ばしてくださいました。その間、アッシリアから攻撃されることもないという保障もくださっています。その残された時間に、主に対してすべきことがあるということのしるしです。

パウロが、私たちに、キリスト者として生きること、死ぬことについての正しい姿勢を教えてください。ピリピ 1 章 23-24 節です、「私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。」ヒゼキヤと違って、パウロには死後のいのちの希望が、はっきりとしていました。ですから、世を去っても、キリストと共にいることを知っていたし、そのほうがはるかにすぐれていることも知っていました。けれども、この肉体にとどまっているならば、教会の人々に仕えることができるから有益だと言っています。何のためにその年月を使うのか？ということが、寿命が延びたということよりはるかに大切なのです。

<sup>7</sup> 次のことが、あなたへの主からのしるしである。主は約束したこのことを成就する。<sup>8</sup> 見よ。わたしは、アハズの日時計に落ちた時計の影を十度後に戻す。』すると、日時計に落ちた日が十度戻った。

主は、しるしをくださいました。驚くべきことに、日時計の影を、後に戻すという奇跡です。ヨシュアの時に、「10:12 太陽よ、ギブオンの上で動くな。月よ、アヤロンの谷で。」と言った時と、同じ現象です。列王記第二 20 章を見ますと、イザヤは、日時計を先に進ませるか、後に戻すか、どちらかだと言っています。ヒゼキヤが、こう答えているのです。「20:10 影が十度伸びるのは容易なことです。むしろ、影が十度後に戻るようにしてください。」十度伸びたら、自然現象のせいだとかいう言い訳が、後できます。でも後に戻るのは、決して言い訳がききません。

これが、アハズによって造られた日時計ということにも、意味深なものがあります。アハズは、イザヤによって、しるしを求めなさいと言われた時に、主を試すことはしない、求めないと答えました。ヒゼキヤは、父の道に倣わず、信仰をもって大胆に願っていたのです。

## 2B 感謝の祈り 9-22

### 1C 死の苦しみ 9-14

<sup>9</sup> ユダの王ヒゼキヤが病気になって、その病気から回復したときに記したもの。

病気になった時に祈ったときだけでなく、回復したときのものも含まれます。

<sup>10</sup> 私は言った。生涯の半ばで私はよみの門に入る。私は残りの年を失ってしまったのだ。

この「生涯の半ば」は、40 歳ぐらい時です。人生の中で最も何かをしようと思ったらできる時です。

<sup>11</sup> 私は言った。私は主を、生ける者の地で主を見ることはない。私は、死人の国の住人とともにあり、再び人を見ることもない。

ヒゼキヤの信仰と、私たち、新約時代に生きる信仰とは、温度差があります。ヒゼキヤには、死後のいのち、すなわち復活の希望が見えません。

旧約時代において、往々に、復活の希望が希薄でした。ダビデも、「詩6:5 死においてはあなたを覚えることはありません。よみにおいてはだれがあなたをほめたたえるでしょう。」と言いました。しかし、ヨブが突然こう言ったことがあります。「19:25-26 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、ついには、土のちりの上に立たれることを。私の皮がこのように剥ぎ取られた後に、私は私の肉から神を見る。」そしてダニエルも、復活してある者は永遠の忌みに、またある者は永遠のいのちに至ることを話しました(12:2)。だからあるのですが、しかし希薄です。

なぜ復活の希望が希薄だったかという、まだキリストが贖いを完成されていなかったからです。旧約時代における贖罪は、「罪を覆う」ことであっても、罪を取り除くことではありませんでした。動物のいけにえによる血による罪のいけにえは、人々の良心から罪を取り除くことはできませんでした。唯一、神の御子ご自身の肉体において罪が裁かれ、それで罪が取り除かれたのです。それで、主が死なれた後に陰府に下られ、贖いが完成したことを宣言し、そして天に昇られました。その時に、多くの捕虜を引き連れてとエペソ 4 章 8-9 節に書いてあります。したがって、その時から陰府にいた聖徒たちは、天に入ることができるようになりました。ここから、復活の希望も明確に始まります。キリストが復活の初穂であり、キリストのうちにいる者も復活します。

<sup>12</sup> 私の住まいは牧者の天幕のように引き抜かれ、私から取り去られた。私は、機織りのように自分のいのちを巻いた。主は私を、機から断ち切られる。昼から夜へと、あなたは 私を終わりに近づけられます。

自分の身体の弱さ、脆さを、引き抜かれる天幕、機織りから断ち切られるように語っています。パウロやペテロも、自分のからだのことを、幕屋に喩えていました。復活のからだを、永遠の住まいに喩えています。「Ⅱコリ 5:1 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。」肉体は衰えていきます。病の時ほど、そのことを実感させられる時はありません。

<sup>13</sup> 私は朝まで叫びました。主は雄獅子のように 私のすべての骨を砕かれます。昼から夜へと、あなたは 私を終わりに近づけられます。<sup>14</sup> 燕や鶴のように私は泣き、鳩のようにうめきました。私の目は上を仰いで衰えました。主よ、私は虐げられています。私の保証人となってください。

主が、雄獅子のように骨を砕かれるとは、主が攻撃しているように感じているのです。燕や鶴のように、鳩のように泣いてうめいているとは、無力で弱い自分を言い表しています。この苦しみは、ヨブももたえ苦しんでいた時に言い表していました。まるで、主が自分を攻撃しているかのようなことを、書き記しているのです。それは、彼本人が犯した罪ゆえではありません。けれども、病があり、その苦しみがあり、死に至るといのは、神が初めに人に与えられたものではなく、アダムが罪を犯したから、罪が世界に入ってきたからに他なりません。

そこで、ヨブと同じように、ヒゼキヤも「保証人」を求めています。圧倒的に自分が罪深いと感じています。けれども、それをどうやって神に持っていけばよいのか、分かりません。それで保証人が必要なのです。この保証人となるために、主は人となってくださり、その肉体において私たちと一つになってくださいました。そして私たちにこの弱さの中において、なおのこと神を知ることができるようにしてくださいました。

#### 2C 賛美への献身 15-20

<sup>15</sup> 何を私は語れるでしょう。主が私に語り、主が自ら行われたのに。私は自分のすべての年月、自分のたましいの苦しみのゆえに、ゆっくりと歩んで行きます。<sup>16</sup> 主よ、これらによって人は生きるのです。私の霊のいのちも、すべてこれらに従っています。どうか私を健やかにし、私を生かしてください。

15 節から、ヒゼキヤの病が治った祈りになっています。主がイザヤによって語られました。そして、主自ら、癒してくださいました。そして、「ゆっくりと歩んで行きます」と言っています。これは、落ち着いて歩んでいく、ということでしょう。主が癒してくださった憐れみを覚えながら、歩んでいきますということです。そして、残る人生も健やかに、生かしてくださいと祈っています。

<sup>17</sup> ああ、私の味わった苦い苦しみは 平安のためでした。あなたは私のたましいを慕い、滅びの穴から引き離されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

ヒゼキヤが病の苦しみの中で味わったのは、その病を引き起こしたわけではないけれども、自分に罪があるという、重荷でした。しかし、主が癒してくださったので、自分に対する神の、罪の赦しを実感をもって受け止めることができました。それゆえ、苦しみが平安となっています。パウロが言ったように、「ロマ 6:20 罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました。」

<sup>18</sup> よみはあなたをほめたたえず、死はあなたを賛美せず、穴に下る者たちは あなたの真実を待ち望みません。<sup>19</sup> 生きている者、ただ生きている者だけが、今日の私のように、あなたをほめたたえます。父は子らにあなたの真実について知らせます。<sup>20</sup> 主は私を救ってください。私たちは生きている日々の間、主の宮で琴を奏でよう。



先ほど話したように、彼は死後のいのちがあり、そこで主をほめたたえようという思いはありませんでした。復活の希望は、この祈りにはありません。けれども、主を賛美したいという強い願いと決意があって、それで死なせないでほしいと願ったことには、すばらしいことです。賛美を、自分の子らにも知らせようと告げています。

<sup>21</sup> イザヤは言った。「ひとかたまりの干しいちじくを持って来させ、腫物の上に塗りなさい。そうすれば治ります。」<sup>22</sup> ヒゼキヤは言った。「私が主の宮に上れるしるしは何ですか。」

この発言は少し逆戻りです。癒しがまだ与えられなかった時に、イザヤが干しいちじくを腫物の上に塗りなさいと言って、それで彼がいやされました。預言者たちも、イエス様の癒しの働きでもそうでしたが、医療行為のように見えるしぐさをしますが、それ自体が直すのではなく、信仰をそこで働かせるきっかけになるものです。これは、とても大切なことで、私たちが医療行為を受けても、主が介入されない限り、直らないのだという事知るべきですね。医者が直すのではなく、医者に神が直すための知恵を与えられるのです。

そして主の宮に入れるしるしを求めて、それから日時計の奇跡があります。けれども、ここで強調したいのは、彼の眼中に何がいつもあったのか？ということです。主の宮なのです。主のところに行くこと、ダビデが主の宮に住まうこと、これをただ一つ願っていると言った、その思いをヒゼキヤは抱いていました。

## **2A 高ぶりを試された王 39**

ところが、39章において彼の心に芽生えた高ぶりを見るのです。

<sup>1</sup> そのころ、バルアダンの子、バビロンの王メロダク・バルアダンは使者を遣わして、手紙と贈り物をヒゼキヤに届けた。彼は病気だったが元気になった、と聞いたからである。

アッシリアが世界を制していた時に、東西両面で戦っていました。西にはエジプトや、ユダを始めとする国々がありますが、東ではまだネブカドネツアルが出てくるはるか前の、バビロンがありました。メロダク・バルアダンはアッシリアに対抗して戦っていましたが、ヒゼキヤが西で勝利を収めたことを聞いたのです。それで病が癒されたことをお祝いするために贈り物を持ってきた、と言っていますが、ここに「手紙」も含まれているのです。これは単なるお祝いではなく、東西における反アッシリア連合の誘いであろうと考えられます。政治的な思惑がいっぱいなのです。

<sup>2</sup> ヒゼキヤは彼らを喜び、宝庫、銀、金、香料、高価な油、一切の武器庫、彼の宝物倉にあるすべての物を彼らに見せた。ヒゼキヤがその家の中、および国中で、彼らに見せなかった物は一つもなかった。

ヒゼキヤは、とんでもない過ちを犯しました。イザヤを通して彼は繰り返し、シオンにこそ救いがあるという言葉聞き、それでもエジプトに助けを呼ぶという過ちを犯し、そしてへりくだって、主の前で祈って、主が憐れんでくださったのです。それだけでなく、病が癒された時は主がそれを直されただけでなく、日時計の逆戻りというしるしまでも与えられました。そして彼は、自分は主の宮で賛美を献げるとまで誓っています。

それにも関わらず、彼はこの連合に気持ちが傾いたのです。彼は自分の家にあるこれらあらゆる宝物を見せました。この世の基準では、このことは当然行なうことです。自分たちがいかに力を持っているかを相手に見せることによって、同盟や連合が結べるというものです。

しかし、主の民はそのようなことを行ってはいけません。ヒゼキヤは、このような使者に対してペリシテに対して言ったように語らなければいけません。「14:32 異邦の使者たちにどう答えるべきか。『【主】がシオンの礎を据えられたのだ。主の民の苦しむ者たちは、ここに身を避ける。』」彼は主の宮に入ることをせず、自分の家を見せびらかしてしまいました。主に付くのではなく、自分自身に拠り頼んでしまったのです。

歴代誌の著者は、このように批評しています。「Ⅱ歴代 32:31 ただし、バビロンの首長たちが、この地に示されたしるしについて調べるために彼のもとに使節を遣わしたとき、神は彼を試みて、その心にあることすべてを知ろうとして彼を捨て置かれた。」主は、私たちに注意を与え、それでも強情に聞き従わない場合は、「では、その通りにせよ」と言われて、捨て置かれます。そして自分の行った結果について、刈り取るようにされます。

<sup>3</sup> 預言者イザヤはヒゼキヤ王のところに来て、彼に尋ねた。「あの人たちは何と言いましたか。どこから来たのですか。」ヒゼキヤは「遠い国、バビロンから私のところに来ました」と答えた。<sup>4</sup> イザヤは言った。「彼らはあなたの家で何を見たのですか。」ヒゼキヤは答えた。「私の家の中のすべての物を見ました。私の宝物倉の中で彼らに見せなかった物は一つもありません。」<sup>5</sup> イザヤはヒゼキヤに言った。「万軍の主のことばを聞きなさい。<sup>6</sup> 見よ。あなたの家にある物、あなたの父祖たちが今日まで蓄えてきた物がすべて、バビロンへ運び去られる日々が来る。何一つ残されることはない——主は言われる——。<sup>7</sup> また、あなたが生む、あなた自身の息子たちの中には、捕らえられてバビロンの王の宮殿で宦官となる者がいる。」

これが、起こったのです。ヒゼキヤが死んでその後に、マナセが王となります。そして、彼はユダの歴代の王の中で、極悪なことを行います。ヨシヤ王が宗教改革を行うも、民の心には偶像礼拝が染みついており、ヨシヤが死んだ後は、悪い王のみ出て来て、バビロンに捕え移されます。

宝物倉の中にあるものは、605年、597年、そして586年のバビロン捕囚によって成就しまし

た。少しずつ、取られて行き、最後はすべて根こそぎ持ち運ばれました。そして、王の息子たちが宦官になることについては、ダニエル書において成就しています。ダニエル、ハナヌヤ、ミシャル、そしてアザルヤです。王族でした。それで、ネブカドネツアルに仕えるため、捕え移されました。

<sup>8</sup> ヒゼキヤはイザヤに言った。「あなたが告げてくれた主のことばはありがたい。」彼は、自分が生きている間は平和と安定があるだろう、と思ったのである。

ヒゼキヤが、自分の今の生活のことしか考えていないことは非常に残念です。

彼の引き延ばされた十五年間は、試された十五年間であります。この間にマナセが生まれました。「Ⅱ歴代 33:1 マナセは十二歳で王となり、エルサレムで五十五年間、王であった。」引き延ばされた 15 年間の寿命の中で、マナセが生まれました。歴史に「もし」はないと言われますが、ヒゼキヤがそのまま、死んでいればマナセは生まれなかったのです。あるいは、ヒゼキヤが妥協した生き方、高ぶった生き方をしていなければ、マナセももしかしたら、悪の道を進むことはなかったかもしれません。

歴代誌の著者は、アッシリアから救われた後のヒゼキヤの生涯をこう評価しています。「32:24-26 そのころ、ヒゼキヤは病気になるまで死にかかっていた。彼が【主】に祈ったとき、主は彼に答え、しるしを与えられた。ところがヒゼキヤは、自分に与えられた恵みに応えようとせず、かえってその心を高ぶらせたので、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った。しかし、ヒゼキヤがその心の高ぶりを捨ててへりくだり、彼もエルサレムの住民もそうしたので、【主】の御怒りは、ヒゼキヤの時代には彼らの上に臨まなかった。」

恵みに応えなかった、というところがまとめであります。私たちがしばしば忘れてしまうのは、感謝であります。祈り願うのですが、それが聞かれた後に、感謝を献げ、自分の献身の決意を貫いているのか？であります。その恵みを忘れた時に、このように高ぶりが出て来てしまうのです。私たちは恵みによって救われただけでなく、その恵みの中に生きるように召されています。そして、今、与えられているものは、すべて主が憐れんで、くださっているものであることを忘れないことです。いったん、自分自身のものだと思った時に、高ぶりの心が入ってきてしまいます。

そして 38 章と 39 章が、イザヤの後半部分、40 章から 66 章までの預言の背景となります。すなわち、バビロン捕囚です。その捕囚の地から、いかにイスラエルを主が救い出され、帰還させてくださるのか、慰めと希望のメッセージを語り始めます。